

ロシアにおける崩壊直後のノスタルジー現象を読み解く ——『ブレジネフ再考』を読んで——

石丸 敦子

目次

はじめに

I. ノスタルジーの現れ

I-1. ノスタルジー現象に関するアンケート調査

I-2. 調査の結果

II. 『ブレジネフ再考』について

II-1. 本書の概要

II-2. パラメータとしての『ゴルバチョフ回想録』

II-3. ブレジネフの時代

II-4. ポストスターリン時代のインテリゲンツィア

III. ノスタルジー現象が意味するもの

IV. ノスタルジー研究の理論化

V. 権威主義症候群の現れは何を意味するのか

V-1. 新自由主義の侵入

V-2. 「安楽」への全体主義

VI. 結論

はじめに

現代ロシアは迷走と苦悩の経験のただなかにあるように見える。破滅的な出来事が日々歴史となりゆくのを手をこまねいて見ているしかないのは自分の国だけではないようだ。現状を打開する行動を起こす以外に意味のあることはないように感じられる中で、はるか昔に、社会主義社会建設という失敗に終わったことの元凶を作った書記長たちの時代を検証することに費やす時間はあるのだろうか。存命のゴルバチョフでさえ、もはや視界の中にはいなくなってしまったかのようなのである。

だが一方、次のような見過ごすことのできない状況のためにソ連史をさかのぼる必要に迫られてもいる。現代ロシアは、ソ連を否定したところから始まったはずだったが、今日またソ連邦の栄光を想起させ、ナショナリズムをかきたてる大国主義に落ちいつているように見える。しかも、崩壊直後にこの状況の端緒を見て取ることができるのだが、それはブレジネフ期に向けられたノスタルジー現象という形で現れ、今日まで継続しているのである。

ソ連邦の崩壊は、はからずも西側と酷似した格差社会を生み出してしまった。それは、人々の苦悩の根源である資本主義に律せられた世界をのりこえる社会主義社会というユートピア像も同時に崩壊させてしまった。平和な平等社会を希求する思想の終焉であり、かつマルクス主義の誤謬が実証されたかのように受け取られ、ショックは計り知れないものがあつた。だが、一方、それは国の中で様々な自由をはく奪され、抑圧され、物理的にも物不足に苦しめられていると伝え聞くソ連の人々の解放の瞬間であり、民主主義国家の始まる福音かもしれないとも解釈できた。冷戦構造の終焉は、当然のことながら平和な、善なる時代の到来をも意味すると了解されたのである。

ところが、ほどなくして振り払ったばかりの全体主義の時代への思慕が現れてしまった。崩壊の時以上といってもいいほどの、今度は、鈍くて重い衝撃を筆者は受けた。大きな犠牲を払ってロシア国家はスタートしたばかりなのに、逆説的にもノスタルジーは社会現象としての広がりを見せていったのである。人々の日々の言説の中に、出版物の中に、アカデミックな論文の中に、世論調査の中に、それは今でも存在している。

ここで、なぜノスタルジー現象が起こったのかという基本的な問いを考えるためには、「停滞」の時代というマイナスのレッテルを張られたブレジネフ時代の再考を余儀なくされる。疑うことなく了解事項として受容されてきたことを、批判的にとらえ返し、確かに「停滞」の時代でしかなかったのかを検証したのち、全体主義の暴力の記憶が忘却され、美化されたノスタルジーのみが前景に現れていることの意味を読み解きたいと思う。

I. ノスタルジーの現れ

多くの人が、あの時期にソ連が解体するとは考えてもいなかったが、ひとたび崩壊の過程が始まると、同時に「灰色の停滞した全体主義の過去から、明るく豊かで文明的な未来へ一足飛びに移る

という希望¹⁾が抱かれた。しかし、その期待とは裏腹に、市場経済への移行が難航し、人びとの生活は極端にひっ迫していく。その時、「停滞」とよばれたブレジネフ期の70年代を、むしろ良き時代として懐かしむという現象が起こったのである。

I-1. ノスタルジー現象に関するアンケート調査

ノスタルジー現象を系統的、学問的に調査した、カサマラとソローキナの『ロシア人の日常の言説の中に見られるソ連崩壊後のノスタルジー²⁾』という論文を土台に、ノスタルジーがどのように現象しているかをまとめてみる。2008年から2011年にかけて、中学・高校の生徒、大学生、軍人、中年の勤労者、年金生活者、ストリートチルドレンとホームレス、国会議員に対し、各属性ごとの150人³⁾に、一人当たり30分ほどのインタビュー形式でアンケート調査が行われた。

調査結果から、わずかの例外を除き、すべての属性に共通してソ連に対するノスタルジーが抱かれていることが確認された。ソ連を直接知らない世代は、親たちや学校の歴史の先生の話やマスコミの言説という過去の物語を内面化することによって、同様のノスタルジーをコピーしている。

I-2. 調査の結果

本稿では、属性ごとに発生したわずかな差異は今後の課題とし、この調査結果を現代ロシア人の抱くノスタルジーとそこから発生した意識として一元化することが可能だと判断し、その主な内容を次の四つに整理した。

(A)ロシアは大きくて強い国である。

(B)ソ連は、偉大な、大きくて強い国である。

(A)と(B)のふたつを抱くには、「巨大な領土」、「豊富な天然資源」、「特別なロシアの精神」という共通する三つの根拠がある。

(C)ロシアになって失われたが、ソ連にはあったものとして、教育、医療、住居、年金などすべて無料の社会保障、他国を畏怖させた強大な軍勢力、そして秩序と道徳があげられる。

(D)他国に対する露骨で攻撃的な敵対意識を持っていて、ロシアの最大の敵はアメリカ合衆国であるとする。

このように回答者は異口同音に述べている。

ノスタルジー現象の実態を確認したところで、ブレジネフ期に関する具体的な研究を見てみる。

II. 『ブレジネフ再考⁴⁾』について

『ブレジネフ再考』は、ノスタルジー現象を含めた最近のロシアの出来事にかかわるものとしてのブレジネフ期を再検証するものである。ブレジネフ期は取り立てた業績を残せず「停滞」の時代という評価が定着しているため、これまでにブレジネフ期を掘り下げる包括的な研究はほとんど行われてこなかった。冷戦期の超大国の一方の雄として無視できない影響力があったにもかかわらず、ロシア語でも英語でもなされていないと指摘されている。そこで、ブレジネフの指導者としての資質やその統治スタイル、在職中に経済成長は見られたのか、超大国の一方の雄とされたことの実像、イデオロギー、第三世界への介入、ソ連に特殊な民族問題に対する姿勢という主な項目について、既出の研究にもあらためて光を当てて調査しなおしたものである。これには、グラスノスチやペレストロイカ以降、アルヒーフの開放度がソ連時代とは格段の差で高まり、新たな資料が入手されるようになったという事情も加わる（最近はや、扉が閉ざされる傾向にあるという）。形式としては、イギリスの大学で教鞭を取る8人のソ連・ロシアの研究者が執筆した10本の論文を、マーク・サンデル、エドウィン・ベーコン編集で一冊に収録したものである。

本稿では、全体を要約するとともに、特に第8章の「イデオロギーの理髪（刈込）が勝利した？ブレジネフ期の知識人たちの生を再考する」に注

¹ 1999年のエリツィンの辞任演説の中の一節。

² В.А.Касамара, А.А.Сорокина, 'Постсоветская ностальгия в повседневном дискурсе россиян' *Российский Политический Процесс*, под Общественные Науки и Современность 6, НАУКИ, Москва, 2011.

³ 基本的には、ロシアの様々な地域に住む150人であるが、ストリートチルドレンとホームレスはモスクワで生活する人びとである。

⁴ Edited by Edwin Bacon and Mark Sandle, *Brezhnev Reconsidered*, Palgrave Macmillan, 2002.

目したい。ブレジネフ期が本当に単に「停滞」の時代として括ってしまうものなのか。ペレストロイカの起爆剤となったはずの知の力はブレジネフ期にはどのような形でエネルギーを蓄積していたのか。崩壊以後、ロシア社会は一転して文化的に空虚になってしまったように見えるが、そこにノスタルジー現象が現れたことは本当は何を意味しているのか、それを解き明かす糸口をつかみたい。

II-1. 本書の概要

ブレジネフ期は、ゴルバチョフによって停滞の時代という概念が定着させられたとする。ゴルバチョフの見解によると、ブレジネフは、軍拡競争やプラハの春、アフガン侵攻といった形で、本質的には残忍なネオ・スターリン主義を追及した。政治局員の高齢化は、科学技術の発展を促し、他国の変化を見極めようとする力に欠けるという結果をもたらした。西欧では、革新の若い力であった 60 年代人が、ソ連では抑えこまれ、共同アパートの台所での議論しか許されなかった。ソ連は疲弊しつつし、腐敗し、新しいプランもなかった。ソヴィエト経済は遅滞し、ながらく機能不全に陥っていた。国家が全てを統括しようとして、一手に資源と物品を最適に割り当てようとしたためである。ここから、「ブラート」という庶民の相互扶助の非公式な第二経済が生まれた。このように描きだしたゴルバチョフは、改革への布石としてブレジネフの時代を「停滞」として回想させたのである。官僚主義、保守主義が、経済成長率の停滞を招いたとして、ソ連末期の危機的状況を避けるには、急進的な改革が最適な解決策と正当化するためでもあった。

II-2. パラメータとしての『ゴルバチョフ回想録』

本書は、ゴルバチョフの停滞説が根拠がないわけではないが、全体像でもないところからスタートする。そのため、『ゴルバチョフ回想録⁵』はしばしば参照される。しかし、本書のスタンスとしては、20 世紀末の大変動をゴルバチョフ一人に還元することを注意深く避け構造的にとらえよ

うとしている。

一方、この回顧録は、島村輝の「言葉は…それが発せられる現場にある限り現在のなものであるとともに、それまでの時間の蓄積をすべて内在する歴史的なものである⁶」というメモリー・スタディーズの観点からとらえ直すこともできる。ゴルバチョフその人は、スターリンの大粛清や農業集団化によるジェノサイドのような餓死者を出した飢饉を身内の経験とする記憶を持ち、フルシチョフ、ブレジネフの時代を生きて、農業従事者として家族を助け、地方、中央の官僚を経、権力の中枢に至りながら体制内改革者となっていたのである。歴史を蓄積した個人であるという点において、その回顧録はソ連邦 70 年の証言だと言えよう。

本書では、回想文学を下敷きにした研究には、人間の記憶には誤りがあるという普遍的な問題と、回想する人はペレストロイカの今を擁護しようとするのと、自身の過去を守る必要が出てくるという独自の問題が存在するという。それは彼らの生や行動の記述に影を投げかける。だが、また作者の現在の心の有り様を知ることができるという重要性も指摘する。

II-3. ブレジネフの時代

いくつかの世論調査から、歴史的役割において、リーダー個人としてはゴルバチョフの方がブレジネフよりわずかに評価が高い。だが、時代の評価としてはブレジネフ期が最も高い。その理由としては、1960 年代から 70 年代にかけて、判断の基準とされた物価や収入が安定しており、生活の基本的な部分には国家が補助金を与えたからである。ブレジネフ期は、ロシアの人々にとってむしろ黄金期であったという人もいる。ゴルバチョフの停滞説は現実に生きられた生活を表現しておらず、検証することなしに「停滞」が使われ、まかり通ってきたとされる。

1964 年にフルシチョフを追い落とし書記長になったブレジネフ個人に関して言えば、深慮遠謀の人というよりは組織屋であって、理論家ではない。権力と栄誉を愛し、虚栄心で有名であり、極

⁵ ミハイル・ゴルバチョフ、『ゴルバチョフ回想録 上・下巻』新潮社、1996 年。

⁶ 島村輝、「村上陽子著『出来事の残響』(インパクト出版会)を読む」『図書新聞』2015 年 9 月 5 日。

端な勲章好きであった。このような表象の奥を見るために、執筆者たちの多くが18年間の在任期間を二つに分けて検証すべきだとする。前期は、結果はともかく前任者のフルシチョフ同様新しいシステムを導入する革新的な面も見られた。後期は自身の病気の影響も加わり、執務に様々な齟齬をきたしていたことが知られている。チェーンスマーカーで、アルコールの問題も抱えていた。彼の日記によると、後期は国政よりも個人的な日々の些事に執念を燃やしたことがわかる。停滞のイメージの中にはブレジネフの個人的資質の低さとイメージの低さも入っていることは否めない。

しかし、政治家としては成功者だったという見解もある。在任の18年間は恐怖政治や大変動はほとんどなく、長期にわたる政治的安定と協調主義的政治を構築した。スターリン体制の復活要請や西側への強硬策をやんわり退け、通念とは裏腹に平和共存を示唆した。安定は停滞と言われたものの裏返しである。また、「停滞」のイメージの要因のひとつとして、しばしば「幹部の膠着」があげられるが、ブレジネフの権威を脅かさない政治局を作ろうとして幹部もかなり更迭された。自分の計画を主張し反対を阻むことができるベテランの有能な当事者とも描かれる所以である。

ブレジネフの功績としては、空前の安定をもたらしたことがまず挙げられる。徐々にではあってもソ連市民の生活水準と社会福祉のレベルをあげようと思渡してきた。ブレジネフのとき、週休二日制、年金受給年齢引き下げ、コルホーズ労働者にも給料や年金の支給、様々な物品のプライスダウンなど、リーダーの権威を高める政策を打ちだしたのである。80年代は50年代に比べると高等教育は4倍に膨れ、科学技術革命は公的言説となり、新知識階級の半分は女性が占めたのである。ソ連の地位をグローバルな超大国として強化したこと、世界の核戦争の阻止に重要な役割を果たしたことなどもあげられる。

ブレジネフの失点としては、人権軽視の一党独裁をとり続けたこと、国際的なデリケートなバランスを不安定にしたチェコスロヴァキアやアフガニスタンへの侵攻、ソヴィエト経済が成長を鈍化させてしまったこと、盛りを過ぎた老人支配に陥っていたことなどである。本来肯定的な側面であ

るはずの平和重視は、逆に防衛セクターに資金をつぎ込むことになり、軍事費が国家予算を圧迫し衰退を促進する大きな原因の一つになってしまった。同時に平和重視はかえって資本主義的産業国の第一世界とソヴィエト・東欧ブロックの第二世界の対立を呼び、その競争力のあるエネルギーを第三世界で現そうとして、冷戦の反目が冷戦の落とし子である第三世界で生まれた。また、地方の共和国に対して、忠誠を抱くことを要求しつつも自立させていたことが後の崩壊の始まりであり、かつ統治不能になっていった原因とされる。

ペレストロイカ時には、ブレジネフがリーダーとしての資質を持っていなかったにもかかわらず、ソヴィエトのエリートに権力の果実を欲しいままにさせ、墮落したやり方で個人の富の蓄積を許すままにしたことによってのみ最高の地位を独占できたと批判された。ブレジネフは中身の無い快樂主義の道楽者だとゴルバチョフは手厳しいが、この文脈では彼はソ連崩壊をブレジネフのせいになしようにしていることになる。

だが、ブレジネフの勲章好きがしばしば国民のジョークの対象になったことは、個人崇拜のポジティブな面として見ることもできる。安心してからかえるのは、ある意味国民がブレジネフに対して徐々に愛着を抱いていたからで、たとえブレジネフを愚鈍だと考えていたとしても、完全な敵意として現れることを防ぐことができたのである。国内ではジョークの種でも、ブレジネフはフルシチョフと違い、外国のリーダーに一目置かれるという、ソヴィエトのリーダーとしての役割は果たしていたのである。

ブレジネフ期の最後の具体的な実像は次のようなものである。人々はなんとか失業せず暮らしていた。経済は成長を止めていたが、国家の歳出入はコントロールされていた。密かな予算の赤字は国債発行となったが、インフレのインパクトはわずかだった。しかし、通貨過剰は少しずつ進み、個人の貯蓄は購買力の三分の二に下がった。固定価格と集団農場の不確定な価格には開きができ、その差は増大し続け個人取引へと移っていった。国力の凋落と共に第二経済は不可欠のものとなっていた。引き継いだときは、ゴルバチョフはまだ危機回避が可能と考えていた。だが危機は決定

しており、終局にあることが判明し、崩壊はすでに避けがたいことがわかっていたとされる。

II-4. ポストスターリン時代のインテリゲンツィア

ポストスターリン時代のインテリゲンツィアについては、西側での研究は比較的乏しいとされている。マルクスレーニン主義というイデオロギー、検閲制度、就職や昇進の操作という党の抑圧の構図は、彼らの生活に自律性などなかったという印象を一般に与えている。

フルシチョフの 1956 年の脱スターリン化のプロセスである秘密報告、それに続く文化的、知的雪解けは知識人たちのリベラルで改革派のグループを創出する重要な契機となった。後にペレストロイカで前景に躍り出ることになる知的刷新の潮流の誕生のときである。限られたエリアとはいえ、アカデミズムと党内部でのこの雰囲気は新機軸の思考や概念の育成を助長した。これはフルシチョフの下で、政策作りの過程で党のヒエラルヒーの外からアカデミズムの助言者を持ってくるという制度に端を発する。この時うまれた関係、連帯は、ブレジネフ期を通して持続された。ブレジネフ下のスタッフとして登用されたアカデミズムの中にいる人、ジャーナリスト、政治家たちは、ほとんど皆このグループからの人たちで、自称「失われた世代」である。

教育のレベルが上がるにつれて、知的労働の大きな貯蔵庫が作られ、数の上でのこの層の強みが作られて行ったが、雪解けは続かず保守的な傾向にとってかわられ反動勢力が地盤をえていった。次第にインテリ側は様々な手段で圧迫されるようになった。検閲は厳しくなり、KGB は知的活動の監視をいよいよステップアップしていった。

しかし、ブレジネフ期も成熟した複合性の高まる産業社会を管理する必要のなかで各分野のエキスパートやスペシャリストがあらためて必要になり、再び一党独裁国家のヒエラルヒーの外で研究機関が立案に参加することになり、政治イデオロギーの複合体に外からの影響が正式に加わるようになった。政策作りのためのフィールドワークを専門にする研究所などは深く広く官僚機構に入り込んでいったので、国中にそのネットワークを広

げ国家の様々な分野の問題を手掛けた。抑圧されてはいたが、党のお墨付きで多角的研究を進めることができたのである。ただし、大半のインテリは依然として党中央委員会の定めた枠内で働くことで満足を感じていた。

党とは関係のないインテリは、反対派としての自分の考えを公にすることはなかった。失われたインテリゲンツィアと呼ばれた彼らは、自身の世界に引きこもり国内の亡命者となった。反体制派の中に入ろうとはしなかった理由を、変化の訪れという潜勢力については絶望していて、抵抗は無意味であり、何も変わらないと思っていたからだとする。大抵のものは、理想を追い求める自由のある比較的特権的なライフスタイルをあきらめつつもりはなかった。彼らはなぜ党の中に飛び込んで中から穴をあけようとしないのかと批判されることになるのである。

プラハの春の粉砕とドブチュクの「人間の顔をした社会主義」の終焉は、保守主義や再スターリン化の権力と戦っていた進歩的な勢力に大きな衝撃を与えた。56 年から 67 年まで開かれていた知識人たちの比較的自由の時代は、狭められていくことになった。正統でない考えの持ち主は、反体制のレッテルをはられ、地位、収入、自由さえも奪われていった。ただし、この出来事も反体制派の息の根を止めたりはできなかった。

抑圧は個人の領域だけではなかった。歴史は書き換えられ始め、特にスターリンと大祖国戦争において目覚ましかった。スターリンのヒットラーに対する勝利の役割の再歪曲に膨大なエネルギーと紙面が割かれた。第 20 回党大会はスターリンへの悪質な攻撃だったとされ、スターリンの復活のシグナルとなった。歴史の後には、社会科学、文学などに及び、知的凡庸さがむしろ称揚された。

では、隠れもない反体制派たちはこの変化にどう応じたか。彼らの活動や作品公開は、圧迫が増大したにもかかわらず継続された。60 年代後半から 73、74 年にかけて、党指導部に向け、サハロフ、トゥルーシン、ソルジェニーツィンを含む、突出した反対派は嘆願書や手紙で訴える運動を展開し続けた。しかし、次第に反対派の運動は分裂していき、宗教の権利、民族の権利、エコロジーの問題、公開性、民主化などの問題分野に分散してい

った。

70年代初期までに、60年代人はシステムの中にニッチを探し出していた。あるものは、新しい考えをイデオロギー的に無難なエリアで探索していた。またあるものは、公的ドグマにはリップサービスをしながら、自分の研究機関の中で新しい研究を行い、新しい概念を開発しようとしていた。アカデミズムの中か、党中央委員会の研究機関の中かで隠れ家を創出し、より新機軸で批判的な研究をするためだった。研究機関は、82年まで生き残りをかけた様々な戦略を駆使して格闘し続けた。モスクワを離れ再スターリン化から隔離した場所なら最適だった。ネットワークは、非公式のコンタクトを通して維持された。関係者のみのセミナー、会話サロンが意見の交換を維持する助けとなった。直接的な反体制運動の中に消滅していかずに継続できた最も大きな要因は、アガンベガンが言ったように、「我々はそれを生き延びる」という深く潜行した信念がもたれていたためであった。

だが、彼らは公的にはストレートに表現できず、書くための巧妙なやり方を探さねばならなくなった。彼らは重要なことを行間に表現するという大転換をうまくやってのけた。ほのめかしや省略、アイロニーを使うこの表現法は「イソップの言葉」と呼ばれた。研究機関はそれぞれの雑誌を発行し、制限された読者を持っていた。これらは公的イデオロギーの代替となった。社会学、政治の理解と受容のための政治科学、制度分析、グローバリズム、未来学などが発達していった。それはマルクスレーニン主義の概念、言語、教義の枠組みなどによって妨げられはしなかった。

体制内の反体制派は注目に値する知的現象として、また、ペレストロイカやグラスノスチの精神的、知的先祖と見なされている。革命的な構造改革を唱え続け、システム内にいた彼らによってペレストロイカは準備されていた。表立った反対派ほどの勇気と無私という対価を払ってはいないけれど、これら体制内の改革者の何千何百の人の活動が、ペレストロイカを可能にしたと言えるのである。

批評家によって、矢面に立った反対派、体制の中にいた反対派、市井の反対派の評価はさまざま

である。徹底的な反体制は何かを書いて組織しようとした点において貢献度は高いとする。制度内反体制派は、中枢にいたからこそ、制度改革が必要と認識するようになり、中から、マルクスレーニン主義を徐々に衰えさせることができ、政治エリートたちの中に共有を浸透させることができたともされる。

85年以降の市民社会の勃興は、徹底的な反体制派の活動とはほとんど関連しない。だが、彼らの犠牲的な苦しみは人々の反乱と抗議を鼓舞する点において、60年代人の生と仕事よりはるかに重要だったとする人もいる。

ペレストロイカのプロジェクトはまず、体制内改革派の指導者と野にある最高の、つまり創造的なインテリゲンツィアである芸術家、詩人、ミュージシャン、ライター、劇作家たちとの和解から始まった。

60年代人は、ペレストロイカの心臓部にいた知的エリートをなして、85年以降優位を占めることになったソヴィエトの歴史の語りの構築において主な責任がある。明らかに彼らは、ネップ、フルシチョフの下での脱スターリン化、そしてペレストロイカを改革と進歩の時代と同定したのだ。そして、戦時共産主義、スターリニズム、ブレジネフ下の停滞を抑圧と反動の時代という風にである。停滞としての評価は、直接彼ら自身の経験に結び付けられ、ペレストロイカの急進性を正当化する必要性から持ち上がったものだ。ブレジネフ期のイメージを知的な凡庸と停滞のそれとすることで、ラジカルな制度再編をもっともらしく語ることができるようにした。勝者によって書かれた歴史を読むときの問題に気付けば、停滞という概念を検証するにあたって慎重にならざるを得ないだろう。

ブレジネフ期が「停滞」であったかどうかという評価は、結論としては、見る側によってどちらとも言えるということである。ノスタルジーが抱かれるに値する側面は確かに存在した。何よりも、アメリカをはじめとする先進国で、ごく一部の繁栄が全体であるかの如くにデフォルメされた社会の底に巨大な貧困層の裾野が広がっていた同じ時に、失業も生死にかかわるほどの貧困もほとんどない社会が実現されていたということは特筆され

なければならないと考える。しかし、文化的には思考をたちあがらせて自らの生を決定できる空間はついに生み出されることはなかった。インテリゲンツィアに注目すると、実は水面下で反体制の文化空間を広げる活動を行なっていて、それが崩壊の原動力のひとつになったことは確かである。しかし、崩壊後には、その知的空間を保ってカストロフィを生き抜く強靱さを持ちえなかった。単に抵抗の力としての知しか生みだせず、カストロフィ後の社会創出のばねと成りえなかったとしたら、知的には「停滞」の時代にとどまったのかもしれない。

III. ノスタルジー現象が意味するもの

ブレジネフ期の状況を見渡したところで、ノスタルジー現象の持つ意味に分け入ってみる。

上述のカサマーラとソローキナは、批判的に対象の意味を捉えるという訓練を受けたトップの大学の学生を除いては、年齢や社会的経済的状况に関係なく、ロシア社会には権威主義的症候群が浸透していると結論づけている。

民主主義的人間とその対置概念である権威主義的人間の特徴は、テオドール・アドルノらの研究からまとめられている。

「民主主義的人間」は自分自身の力を信じている。政治的生活への参加をいつでも受け入れる準備があるが、上からの援助は期待していない。社会全般に対して批判的な考察を行うことができる。

「権威主義的人間」の特徴は、権威あるもののへの絶対的服従と、自己より弱いものや少数派に対する攻撃的性格が共生していることである。自身で責任を引き受けようとはしない。それは自分自身の不完全さ、無力さ、卑小さの感覚から来ている。思考の柔軟性に欠けており、自分の意見や関心が社会でも常識だと誤解して捉える傾向が強い。他国に敵を見いだそうとする。権力との不条理な関係であり、密かな他者の侮蔑による自己肯定だということができる。

上記で抽出された四つのノスタルジーは、確かにこの権威主義の特徴の分類に合致している。ナチスの台頭を受け入れた普通の人々の心理を分析しようとする、この 50 年代の議論が、今日の状況にも当てはまってしまふことに括目させられる。

カサマーラとソローキナは、国民の大多数を占める社会的人格が権威主義に覆われた状態であるからには、近い将来に民主的な国家が成立する可能性は低いと見ている。

IV. ノスタルジー研究の理論化

ノスタルジーという言葉は、通常、きわめてエモーショナルな心理的傾向として理解されている。しかし、本質的には、革命の後などに不随意的に立ち上がる記憶の一形態であって、集合的記憶を構築しうるものである。

スヴェトラナ・ボイム⁷は、そのノスタルジーを独自に解析し、理論化している。それによると、ノスタルジーは失われた故郷を、歴史を超えて再構築しようと試みるものであるが、そのとき、ひとは自分がノスタルジーに囚われているとは考えず、むしろ再構築されたものこそが真実であり伝統であるとする。「想像の共同体」である故国への帰属意識を記念碑のようなものに物質化する力さえ持っている。つまりノスタルジーは存在があやふやなフィクションを含むかもしれない過去の事物に恋こがれて、それをただいまの世界にもう一度呼び戻したいという欲求であるといえる。

しかし、ボイムは同時にこのノスタルジーを、現象世界の出来事の意味を獲得しようとする思考を立ち上がらせる、すぐれた媒介物でもあると捉えたのである。憧れを抱くこと自体、そのノスタルジーが反事実的なものだと思わせる。絶対的な真実であり自明なものとされてきたものを疑惑の中に招き入れる始まりである。それは、ノスタルジーの欲望が作り出したものを解体してしまう、再帰的で積極的な契機となるのである。

思考の橋渡しとしてのノスタルジーと同じ作用は、もとより分析ツールとしての文学にも認められる。

カズオ・イシグロは、文学講義⁸のなかで「なぜフィクションか？」という問いを立てる。

人にはこうなりたいという状況があるが、それを小説の中に見いだして、曖昧なものの中からはその形を削り出し、獲得していくことができると

⁷ Svetlana Boym, *The Future of Nostalgia*, Basic Books, 2001.

⁸ NHK 制作「カズオ・イシグロ文学白熱教室」(2015 年 8 月 16 日放映)より。

いうのである。ノスタルジーも、個人のなかで、そして社会的格子のなかで構築されるユートピアを脳裏に像として結ばせるものである。

筋書きや時系列に囚われないで書くことのできる小説は、記憶というものを扱うのに適しているとイシグロは言う。ある記憶に付随して別の記憶が呼びさまされる。まさにノスタルジー現象であるが、現れの密度が濃いほど、その個人の記憶、社会の記憶を封じ込めたままにしておくわけにはいかなくなるのである。

その記憶というものが、外的内的圧力を受けて変容するものであれば、記憶はある意味信頼性に欠けるということになる。人は語る時、少し飾って本当でないことを言うが、聞き手はそれをストレートに受け取ったりせず、その語りの裏の本心を慮ろうとする。小説も(そしてノスタルジーも)信頼性のないことが描きだされた時(ストレートにはそのことを語らないという意味において)、読者はそれを読み取るスキルを発動させることになるのだ、と彼は言う。嘘であってはならないが、あえてフィクションであることが、またノスタルジーという幻影のような記憶であることが、思考の始まりを呼び覚ますものとなる。小説と同じく、この特性が、概念的な意味でのノスタルジーの批判的潜勢力である。

V. 権威主義症候群の現れは何を意味するのか

これまでにも、無料の社会保障や失業の不在といった、ソ連にはあったがロシアになって失われたものについて、経済、政治、民族問題などの個別の実学的観点から研究がなされてきた。一見、社会主義体制の優位と見える事例も、そのシステムの根本的不備が肯定的に現象したものであることや、人びとの親密な関係が、ソ連型社会主義体制下にしか現れえなかった仮想のヒューマニティであったことなどを解明してきた。しかし、それだけでは、社会の根底にある人々の感情やメンタリティにまで踏み込んで考察することは難しく、現代ロシアの動態やダイナミズムを俯瞰してうまく説明することはできていないと考えられる。

カサマーラとソローキナの二人は、現代ロシア人に発現しているものは欲望が投影されたほうのノスタルジーにすぎないことを喝破した。それが

描き出すものは、大局的な未来図としてのユートピアではなく、個人の利益や個人の事情に収斂してしまうプチブル的ユートピア像であるということができる。

二人は、この欲望のノスタルジーをはぎ取って、ロシアの本当の姿を見るために、ボイムが「反省的ノスタルジー」と命名した概念的に抽出された方のノスタルジーを発動させるという態度を取り、現代ロシアを覆っている権威主義症候群という鍵概念を浮かび上がらせた。

V-1. 新自由主義の侵入

ブレジネフ期のソ連は、平和主義的な相貌を取っていたとしても、全体主義からは脱却できていなかったのだから、そこには権威主義もはびこっていたわけである。次のような状況はその証しと言えるかもしれない。ソ連の人々は、崩壊するまでそのことを予想だにしなかった⁹と言えるのだが、それは、体制に不満をかかえつつも、体制に組することによって生活が安定的に保たれていたからである。トクヴィルが言ったように、誰もが自分に引きこもり、他のすべての人々の運命にほとんどかかわりを持たずに、一つの巨大な後見的権力によりかかっていた¹⁰、全体主義の中で、人びとは子どものままにとどめ置かれていたからである。

しかし、新生ロシアの権威主義状況は、崩壊後に新たに立ち上がったものと言える。グラスノスチ、ペレストロイカは、ゴルバチョフの志向した社会主義体制の改革からは矢印の向きを変えてしまったが、政治に参加し、封殺されていた要求を声に出す空間だけは、確かに切り開かれて、それが崩壊につながり、一旦はソ連の権威主義はなりをひそめたからである。

しかし、崩壊直後から、ノーメンクラトゥーラ¹¹が混乱のすきまを縫って国家の財産を横領し、新たな財閥、新たな資本家階級が産み出されたのである。皮肉にも、ソ連邦70年が躍起になって消

⁹ Alexei Yurchak, *Everything Was Forever, Until It Was No More, The Last Soviet Generation*, Princeton University Press, 2005.

¹⁰ 森川輝一『〈始まり〉のアーレント 「出生」の思想の誕生』岩波書店、2010年、261頁。

¹¹ ソ連共産党の各機関が有する人事のリストを言うが、転じて、そのような任命職にある幹部や特権階級も指す。

減させようとしたものである。市場経済への移行は困難を極め、立て直しをかけて「ショック療法」を受け入れたが、その下で「すさまじい勢いで進んだ私有化・民営化は、巨大な社会的混乱を生みだし、今日までその深刻な影響が続いている。一人当たり GDP も 3.5% の割合で低下し、人口のかなりの部分が貧困におちいって、その結果男性の平均寿命は 5 年も短くなった。」¹² その当時一般には理解されようもなかったが、「ショック療法」は IMF を代理にした新自由主義の露骨な介入の始まりだったのである。

この後、ブーチンの時代に、イノベーションによるのではなく莫大な埋蔵量を誇る天然資源のおかげで国家は何とか立て直されるが、すでに新自由主義状況はロシアを席卷してしまっていた。ハーヴェイが指摘するように、実践での新自由主義は、その元々の理論と異なり、企業が自由に資本蓄積する空間を切り開くためであれば、市場や行政での国家の介入を積極的に促すのである。その時、国家や企業は「国民の忠誠心を確保するため」¹³ に、新手のナショナリズム、そして権威主義を再生産することになるのである。

ノスタルジーが露わにした、ロシアの人々に巢食う権威主義症候群は、国家が新自由主義におおわれていることのまぎれもない証左となる。

V-2. 「安楽」への全体主義

藤田省三は、『全体主義の時代経験¹⁴』の中で、現代世界を「すべてのものが「鯨の腹中に」呑み込まれて生きている今日」と言った。これは、現代が新自由主義的経済活動、新自由主義的価値観に覆われた世界になったという意味だと解釈されると。多くの人は、その鯨の腹中に呑まれていることにすら気がついていないという状況でもある。

ハーヴェイは、世界の状況とそれを律しているものについて、個別に立ち上がっているように見える事象を貫いているものを、経済の観点から包括的にとらえようとした。藤田は、同じことを人間の精神、心の有りようという観点からとらえよ

うとしている。

藤田は、まず、「抑制のかけらも無い現在の「高度技術社会」を支えている精神的基礎は何であろうか」と問いを立てる。

それは、私たちに少しでも不愉快な感情を起こさせたり苦痛の感覚を与えたりするものは全て一掃して了いたいとする絶えざる心の動きである。苦痛を避けて不愉快を回避しようとする自然な態度のことを指して言っているのではない。むしろ逆に、不快を避ける行動を必要としないですむように、反応としての不快を呼び起こす元(刺激)そのものを除去して了いたいという動機のことを言っているのである。…不愉快な社会や事柄と対面することを恐れ、それと相互的交渉を行うことを恐れ、その恐れを自ら認めることを忌避して、高慢な風貌の奥へ恐怖を隠し込もうとする心性である¹⁵。

この不愉快な事態の一掃殲滅という心性を「安楽への全体主義」としたのだが、まさに新自由主義的世界を支える心性を腑分けしたものであろう。この時、権威主義は「安楽への隷属」と表現される。

さらに、現代は、第一次世界大戦やファシズムが吹き荒れた時のものとは異なる全体主義におおわれた時代だとする。それは前ふたつの暴力的なものとは異なり、経済中心主義の一環であり、平和主義的な「文明全ての全体主義」とであるとされている。ハーヴェイとの共通の言葉で言えば、金、土地、労働という、本来は売り買いの対象にならない擬制の商品すなわち記号によって虚構の経済活動が行われ、人間はその空虚な世界の中で「特殊な商品」(マルクス)として費消されながら生きている¹⁶。新自由主義がもたらしたこの全体主義の下では、安楽に隷属しており、反省能力や自己批判能力が欠如してしまう。

この状況を打開するのは難しいと、絶望的ともみえる述懐をもらしている。しかし絶望の中から希望を引き出すために、「衆愚政治だからいけない

¹² デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義 その歴史的展開と現在』作品社、2007 年、216 頁。

¹³ 前掲書、112 頁。

¹⁴ 藤田省三『全体主義の時代経験』みすず書房、2014 年。

¹⁵ 前掲書、29－31 頁。

¹⁶ 前掲書、78－84 頁。

と全面否定するのではなくて、より少なき害悪を選ぶ¹⁷⁾という立場を表明する。また、藤田の言葉ではないが同じ本に、「共産主義の実験を教訓として汲みとるには、大きな設計図なしにやっけていく哲学が必要だ¹⁸⁾」とされている。前触れなしにやってくるカタストロフィの後の社会の青写真など用意することはできないのだ。そのために「一大知的勢力¹⁹⁾」を作ろうというのが藤田のスローガンなのである。

VI. 結論

ノスタルジー現象から、ロシアを含む現代社会の新自由主義におおわれた逼塞した状況が見えてきた。

大多数のロシア人にとっては、市場経済システムに転換しても、民主化や全体が豊かになるという希望は棚上げにされたままである。亡命者のように眼前にはない現実を渴望している。ソ連時代への回帰願望というノスタルジーを抱けば抱くほど、大粛清や監視とテロによる抑圧など、様々な自由をはく奪されていた全体主義の過去という否定的な特徴は忘却されていく。国家経済が一応の安定を見ている中でのノスタルジー現象の継続は、解体以来の文化的な空虚が依然として存在したままだからだと思われる。人びとは疎外され続けているのに自己の疎外状況を認識することができないでいる。普遍的な意味において、批判的潜勢力を持つ方のノスタルジーの駆動は、存在からの疎外という、古典古代以来のものであって、かつ極めて近代的な状況を考え抜こうとする哲学的な営みであると言い換えることができると思われる。

さらに、ソ連にノスタルジーが抱かれるには、もう一つの理由があると考ええる。もしも本当に社会主義社会が実現するならば、それは現実的に価値のある社会だと考えられているからである。ヴァルター・ベンヤミンは、権力者が歴史の構築過程で打ち捨ててきたものの廃墟の中から、再び人々の夢の形を救い上げ、新たな光を投影しようとした。崩壊以後は失敗に終わったこととして顧みられることは少ないが、「全体主義の原罪を免れ

た社会主義の可能性²⁰⁾」という、捨ててしまうわけにはいかない夢の探求の始まりともなりうる。そのことが、ソ連の経験を知ることの、重要な現代的意義のひとつだと思われる。

だが、ハーヴェイはさらにそこから踏み込む。

支配階級が権力を一部でも手放すことはまずない…逆説的だが、資本家階級の権力そのものよりも、むしろ労働者階級の強力な社会民主主義運動の方が、資本主義を救い出すことができるかもしれない。…資本主義の危機が進行して、苦しみ、飢え、そして死ぬことさえあるのは、上層階級よりも普通の民衆だからである²¹⁾。

ハーヴェイは、新たな形の世界主義体制の追求を否定するものではない。しかし、支配階級の転覆が極めて難しいことを認識せざるをえないのであれば、同じく脱却不可能な資本主義社会の手薄の一角を突破するために、支配階級がその脅威を払拭することのできなかつた「民衆の政治運動」なるものにかけることで、資本主義のかたちを変革し、できるだけ民衆の方に流れを引き寄せようとしているのである。

現在の状況を動かす可能性が出てくるとしたら、それはハーヴェイの言うように、市民の反対運動が横に連携された時²²⁾であろう。そして、その連携の実現には、藤田の言う哲学、あるいは「一大知的勢力」が不可欠であるに違いない。

(ISHIMARU ATSUKO・東京外国語大学大学院博士前期課程)

¹⁷⁾ 前掲書、170 頁。

¹⁸⁾ 前掲書、179 頁。

¹⁹⁾ 前掲書、133 頁。

²⁰⁾ ハンナ・アーレント『全体主義の起源 3 全体主義』みすず書房、1968 年、訳者あとがき 324 頁。

²¹⁾ 『新自由主義』、215 頁。

²²⁾ 前掲書、216 頁。